

ば酒を售りて產業とし、わが親を養ひ、且安逸ならしむるにはしかじといひて、やがて橐中の書
畫をことぐく散鬻して、陶器酒具を購ひ求むるに、猶舊癖依然として、その買ふところの器具、
みな唐山舶來の品物のみ、ことに酒は洛市の美醸を備へたりしうへに、七重の絹もて七たび漉
たれば、その味ひ清芳にして烈ならず、醒意甚だ快く、かつて宿醒せず、かくて門簾に竹醉館の三
大字を書し、外に招牌を掲げて、その面に、此肆下物、一則漢書、二則雙柑、三則黃鳥一聲とするした
り、かゝれば好事の年少つねに往て宴を催す、これによりて來賓たえず、されどもその價は、酒の
多寡によりて贏利を貪らず、毎歲春の半にいたりては、櫻花の盛開にあたりて、日ごとに大樽酒
器を荷擔ひて、東山に座を設け、嵐山の江畔に行鬻ぎ、また秋の末になりては、霜葉の紅に染る頃
ほひ、東福精舎に席をひらき、臨川禪院のあたりに賣りありきつゝ、般若湯の三字をしるしたる
酒旗を建たるを、遊人の認て、はじめはあやしみ、さては笑ふものもあり、されどもその酒の精好
にめで、後にはあらそひ就て飲めりとかや、ことに文人才子其風流を愛し、詩を賦し歌を詠じ
て、これに贈るもの多ければ、その詩歌をあつめて卷となし、賓客の觀に備へるとぞ。

〔和漢三才圖會

家飾具〕旗。音幌、帶音廉、左加

波太、今云酒林

按旗酒家望子也、望子卽幟也。○中近世倭所用望子多束杉葉爲之、形如鼓、凡酒性喜杉、用杉材作酒
桶、投杉柿於酒中之類亦然也、不自釀而沽酒家則出看板爲幟。

〔瓦礫雜考〕酒

酒屋の軒に杉の葉束ねたるをつることは、杉の葉を酒にひたす事あり、又木香といひて、よき杉
木の根を削りたるを、酒の中に入る、こともあり、又酒に用る器物みな杉にて造るものなれば、
これらによりてかくする歟ともおもへど、猶よくおもふに、杉の葉を酒にひたすことは、味變り
たるをなほさむとしてすること也、又中品の酒は、六七月の比、遠方に運送するには、途中にて損す